

今日が一番、幸せな土曜日に

もうすぐ、さようなら。

彼が窓際の席に座り、隔てた先の私を見ている。いつまでも手を振っているのもおかしいから、お互い笑ったり、時々別れを惜しむ表情を浮かべる。

新幹線のホームは、すぐ近くに相手がいるのに声の届かない距離。出発まで残りわずかな時間、少しでも彼の顔を眺めていたい。

発車ベルがけたたましく鳴り響く。この数日間の旅行の思い出に、終止符を打つような少しだけ不快な音。

私は大げさに、ため息をつく。

——もう行っちゃうのね。

一ヶ月に一回の遠出デート。

遠距離になって一年以上が経つ。

学生ときは、毎日のように顔を合わせていたけれど、私が社会人になり上京したタイミングから離れ離れに。でも、遠くにいるからこそ、確かな愛を心に宿す。

ただ、こうして帰りを見送るとなると、途端に寂しさがこみ上げる。彼の優しさを、ぬくもりを、匂いを抱きしめられない日々がまたやつてくる。

それらを補うよう常にラインをして、タイミングが合えば電話も欠かさない。

彼が乗車する直前まで手を繋いでいて、離れた瞬間に感じる空気の冷たさが現実を突きつける。たぐり寄せるように腕を伸ばすも、彼はまるで車両に吸い込まれるようだった。

振り返って――。

扉が、空気が漏れたような音とともに閉まると、アナウンスが流れる。私の視界から彼が外れていく。姿が見えなくなるまでちよつとだけ駆け足で、後を追う。髪型が崩れても、メ

イクが落ちても、人目を気にせず大きく手を振りながら。

その努力虚しさに、残酷なほどのスピードで彼は過ぎ去っていった。

もう、遠くへ行つてしまった。

次に会えるのは来月。今度は、どこへ行こう。

私は少しだけ荒げた息を整えて、ケータイを取り出した。

——気をつけて帰ってね。

数秒後、彼からの返信。

——かおりこそ、気をつけてね。

彼の既読と、私が送信したタイミングはほぼ同時だった。その事実が喜びをもたらしてくれ
る。

文面から、愛されていることを改めて知る。

まだ私が大学生のときもそうだった。

船舶職員になれる学部に所属していたため、四回生の一月から三月まで船上での生活を強いられていた。いわゆる実習のようなもの。

彼とは、学部もサークルも同じで、一緒にいるのが当たり前になっていた。りゅうと離れて過ごすのは、大切なものを奪われた気分陥った。

彼のいない日常は、私にとって永遠に完成されないパズルのよう。電波も通じにくい、連絡もスムーズに返せない日々が、私の中で彼の大きさを物語っていた。

その間、幸せな出来事が起きた。

彼が、手紙をくれたのだ。

普通は届かないけれど、時々寄る帰港地に着いたタイミングで手紙があれば受け取れる。行程スケジュールを知っていたりゆうは、私宛に送ってくれた。

それ自体が嬉しいのはもちろん、彼自身そういうことをしてくれたのは、今までなかったからこそ例えようのない気持ちになった。

ぎこちない、時間をかけて書いてくれたのを推し量ると、一行目に書かれた——香織へ——の文字を何度も読んだ。リラックマの便箋が可愛い。

船の生活を終えてからはすぐに就職。地元の神戸ではなく、東京。

これで本当の離れ離れに。

でも、私たちはすでに三ヶ月間、ほとんど会えていなかったから、きっと今後も大丈夫だろうという自信があつた。この期間を乗り越えられたのならば、問題ないと。

それからは一ヶ月に一度のデート。

せつかくならばと、連休や有給を使って旅行を繰り返していた。

ただ、楽しい瞬間はあつという間に終わってしまう。

彼を見送るのがこんなにも切なくて、遠くに感じるなんて。

りゆうと、もつと一緒にいたい——。

その願いが叶うには、彼の就職活動が鍵だった。

もうすぐ、始まる。

駅のホームに立っていると、また新たな車両がやってくる。見渡せば、私たちと同じような状況下に置かれたカップルがいた。

私は帰路を辿りながら、なんて返答をしようか悩んでいた。

*

——今度、どこ行こっか。

スリーブモードのケータイに通知が来て、その文面が浮かび上がる。僕はかおりと一緒に過ごせばどこだって嬉しい。それに、大抵決めるのは彼女。行程もそうだし、サプライズの演出等に関しても、僕は不慣れだ。

次、会うのは翌月。別れた途端、明日からの日常は随分と退屈だ。

まだ大学院生ゆえ、平日の昼間は学校、夜はバイトの日々。そして、時々飲み会。

今までは土曜日にデートをするのが僕たちのスタイルだった。けれど離れてからは、その曜日にかおりを想う。

それぞれ付き合いもあるから、異性がいる場の飲み会はお互い容認していた。基本的にはあまり行かないようにしていても、人数合わせで誘われるときもある。

ただ、正直あまり面白いものではなかった。

二、三時間の会を必死に盛り上げて、女の子を笑わせて、男だから会計の際は少しだけ多めに払う。

その瞬間は楽しいけれど、帰り道にふと、同じお金と時間を使っただけでかおりとデートした方がいいのに、と思ってしまう自分がいる。

改めて彼女の存在の大きさを再確認する。

昔から一人を好んでいたけれど、広い世界に連れ出して、様々な体験をさせてくれたのは

紛れもないかおりだった。

それまでは、家でギターを奏でていると、気づいたときには日付が変わるほど没頭していただけだったから。

彼女との出会いは、二回生のとき、軽音サークルに入部したのがきっかけだった。

学年は一つ上だけど、歳は二つ違い。

先輩の同期は端正な顔立ちをした女性が多く、中でも一番華のある人が、かおりだった。

あとから聞いた話では、僕に対しての印象はあまり良くなく、変な奴が入ってきた認識だったそう。剃り込みをしていたから悪目立ちしていたのだろう。

急接近したのは五月、深江祭という文化祭が開催された日。

催し物で軽音サークルは屋台で焼きそばを提供。そのとき手伝ったのを機に、話すようになった。

部室で一緒に練習をしたり、友人を交えてライブを見に行ったりし、会う頻度は他の部員

たちよりも一歩リードしていた。

初夏、ライブ鑑賞後の出来事だった。

「ねえ、私のことどう思ってる？」

突然そう言い寄られ、言葉が詰まる。

少し前から、彼女の行動や態度を見ると、ありがたいことに一方的な片思いではないのを察していた。

でも、なかなか自分から切り出すタイミングがないまま時間だけが過ぎていた。

その日、彼女の積極性のおかげで、僕がかおりへの想いを告白し、七月二日に交際をスタートさせる。

バラバラな運命を辿る、僕たちの道が一つとなった。

そうなる前から毎日顔を合わせていたけれど、変わったのは毎週土曜日のデートというイベントが増えたこと。

僕たちは居心地がよかった。

ふとしたときに訪れる沈黙に、何も焦ることなく、良い意味で空気のような存在。週末、二人でいる幸せをかみしめるために、勉強やバイトに勤しんでいた。

しかし、彼女が上京し、遠距離恋愛に。

以前は家に一人でいるのが普通だったのに、いつの間にか恋い焦がれる日々。

「りゅう、今日しんどいことがあつてさ……」

風呂上がりのようでヘアバンドを付けたまま、彼女がテレビ電話をかけてきた。職場での悩みを打ち明ける。頷きながら彼女の頑張る姿勢を画面越しに悟る。

「かおりは努力しているから大丈夫だよ」

そう言うと、少しだけ間が空く。

「——ありがとうね」

仕事に熱心な彼女が好きだ。心から応援したいと思う。そして同時に、自らを鼓舞する。

僕の就職活動が始動する。

志望していた会社が関西にあり、学部卒で入社を希望したが、結局大学院まで学び、動き始めた。

しかし、僕の中でどうしても、かおりが脳裏をよぎる。

ずっと地元で暮らしたい願望があった。

けれど、離れたままにいるのは不安であり、心配だった。

彼女と一緒にいたい――。

僕が上京せず就職し、彼女に来てもらう案も考えた。

でも、自分だけ好きなことをして、無理言って辞職させるのはフェアではない。

何社も面接を繰り返しながら、人生の選択はどこに照準を当てればいいのか、何日もずっと頭を抱えていた。

ただ、毎日のようにかおりと連絡をとっている日常を失いたくなくなかった。彼女のいない生

活なんて、想像するだけで苦しい。

——僕が、東京へ行こう。

そう決断して、しばらく経った夏のある日。

「内定、決まったよ」

彼女は自身のことのように喜び、お祝いをしてくれた。

あとは勤務先が半年後に決定する。

候補は、東京か、横浜か、三重。

そして、世間に赤と緑の装飾に覆われた冬の時期が訪れる。

サプライズは苦手でも、クリスマスだけはいつも気にしていた。プレゼントをどうしようか、どんなプランを立てようか。ハロウィーンを過ぎてから一気に世間は冬に染まる。今までで最高の贈り物を届けられることを信じてそのときを待った。

やがて内定先から一報が届く。

職場は横浜。

ようやく翌年から、また幸せな土曜日がやってくる。最後に握った手のぬくもりを思い出しながら、報告するために電話をかける。

ワンコールの直後、通話状態になった。

*

「ご結婚おめでとうございます」

笑顔で接客してくれたスタッフのセリフに、私たちは向き合って、たどたどしく「ありがとうございます」と返答するほかなかった。

今いるところはブライダルフェア。

結婚した人たちが挙式場所や、今後の生活における必要な情報を仕入れるイベント。

見渡す限り新婚夫婦が何組も。中には小さな子どもを連れてくる人も。

「プロポーズはどこでされたのですか？」

何の疑問も持たずに訊いてくるその姿勢に、言葉を濁すのに苦労した。なんとかうまくかわしながら会話を続けていく。

りゅうの勤務地がわかったその半年後、彼は横浜にやってきた。遠距離をし始めたときからいから、将来結婚しようという話はしていた。

決定的でなかったのは物理的な距離の問題。それが彼の就職によって解決され、情報を早く知るのに越したことはないという結論だった。

いくつかある式場のうち、詳しく話を聞いたのは四つ。挙式会場の第一条件は海の見えるところ。

選んでいるうちにテンションは上がり、二人が望む最適な式場を見つけてしまう。

「今日、ご契約いただければ本来の価格よりも安く式を挙げられますよ」

満面の笑みを浮かべ、その謳い文句にうまく誘導されるがまま、早とちりしすぎた私たちは婚姻届を提出する前、求婚を受ける前に申し込んでしまった。

「ありがとうございます。日程も今決めちゃいますか？」

「どんだん話は進んで行く。」

抑えたい気持ちもありつつ、このまま勢いによってしまうのもアリかな、なんて。

取りやめるのならまだ、間に合う。

けれど華やかな雰囲気にもまれ、自然と頭の中ではどの友人を招待するかを思い描いていた。気分は立派な新婚さん。後戻りする選択肢は、萎んでいく風船のように収縮し、そんなことを浮かべたのを忘れるくらい舞い上がった。

そして、翌年の五月十九日に確定させる。

結婚しよう、の一言をもらわずに。

本当は、私の誕生日——四月十三日——に彼がサプライズで何か仕掛けてくるのではないかなど、少しだけ期待していた。

彼の中で何を考えているか、わからなかった。想いに陰りがあるとは微塵も思っていない。確固たる自信があった。

でも、やっぱり私はあなたの言葉が欲しい——。

すべてが整ってしまつて、残すイベントはプロポーズだけ。

書面にサインする彼の横顔を見ていると、突然胸が締め付けられるような感覚を抱いた。

*

ペンに力が入る。彼女を支えていく責任、その重圧。社会人になつてまだ一ヶ月。いろいろなものを覚悟しなければならぬけれど、初めから想定していたこと。

そうでなければ僕自身、関東に来なかった。

少し先かそうでないかだけの違い。

ただ、捺印の手前になると緊張が走った。

必要項目の記載を終え、今後の段取りの説明を受けた後、僕たちは少し興奮気味に会場を去った。

家に着き、大きくため息をつく。

残す課題は、プロポーズだった。

遅くとも年内には伝えなければならぬ。七月二日。もしくはクリスマス。いや、さすがに遅すぎる――。となるとやはり二ヶ月後に迫った付き合った日か。

人生最大の決断なのに、すでにかおりに悟られている状況下は明らかにやりづらかった。とはいえ普通に渡すのも味気ない。

あらゆることが一気に思考回路を巡った。どうすればいいのかが全くわからなかった。

何をすれば喜んでくれるのか、何をすれば彼女の笑顔が見られるのか。他の作業に取りかかれなくなるほど頭を抱えるものだとは想像していなかった。

ネット検索の履歴は関連ワードで埋め尽くされる。数多く調べた中で、僕は六本木のレストランを選択する。

そして、当日。

まだあまり着慣れないスーツをまとい、その日の午前中、かおりと会う前に予約したお店に足を運んだ。

「本日はよろしくお願ひします」

打ち合わせを行い、流れの確認。用意していた小さな箱を取り出し、スタッフに渡す。個室を希望していたけれど、状況次第では案内できないかもしれないと伝えられていた。

話を聞き終わり、曲がったネクタイを直して合流場所へと向かった。

今日は五年目の大切な記念日。

ドレスコードを指定していたから、かおりは黒いドレスを着用して来てくれた。暑苦しさを感じさせないのは彼女の白い素肌が顔を覗かせているからだろう。

食事、買い物、という普段と変わらないデート。

でもこういう何気ない時間が、日常を彩っている。二人並んで歩いているだけで自然と笑みがこぼれてくる。

夕方。

何度もチェックしたはずなのに、焦りと緊張からか、内容を再度確かめるために、かおりに隠れてケータイを見る。

もうすぐ、もうすぐ。

場所は、六本木テラス『フィリップ・ミル』。

訪れるのは今朝を含めて二回目なのに、改めて圧倒される内装。高級なホテルを連想させる。

名前を告げると、個室に誘導されることに。

その途端、僕の中で誰かと間違っている可能性があるのではないかという不安が一気に押し寄せた。てつきりダイニング席になると予想していたからだ。

だから実際に手配されたとき、合っているかどうか疑ったほどテンパってしまった。

そんな僕の内情を知らないかおりは、「すごいねえ」や、「綺麗だねえ」と言ってくれていた。

その純粋な声で少し気持ちが安らいだけれど、肝心の、メインイベントがまだ残されている。ずっと考えていた。今日を迎えるまで。あの日、挙式の日取りを決めたときから。

コースの食事が次々と運ばれてくる。

こんなにも装飾にこだわった料理を味わうのは、人生で初めての経験だった。一品出てくるたびにゆっくりと味わいながらお互い感想を語り合う。

メインディッシュ後、デザートが控えていた。

打ち合わせ時、「そのタイミングで告げてください」と言われていた。

クロッシユ——料理にかぶせる金属製の覆い——を乗せたお皿を店員が持ってきた。

固唾を飲む。呼吸が荒くなる。でも、彼女にばれないように装う。膝の上に置いた手からは汗が驚くほど滲み出ている。

テーブルに置かれた。

蓋が店員の手によって開かれる。

中には、指輪がセットされている。

まだ彼女の視界に入っていないそのわずかな瞬間、はちきれそうになる。

言わないと、言わないと。

何か、喜びそうな言い回しを。

頭が真っ白になるとはこういうことか、というのを思い知らされた。

あらわになったその一瞬、彼女は言葉を失ったような表情をする。

ありのままの気持ちを、かおりに――。

「結婚してください」

彼女は、目からこぼれる涙を拭きながら、指輪と僕を交互に見る。

「りゅう、もう一回言ってほしいな。嬉しくて泣いちゃって、なんかうまく聞き取れなかった」

照れ臭かった。

今一度、覚悟を決める。

結局は一番伝わるストレートな表現が最適だった。

「結婚してください」

これで全部整いました。あとは本番を迎えるだけ。

――それが今日、この日なのです。

一番綺麗な、華のある君の姿を僕は見たかったのです。

*

新郎 糸田 龍一郎

新婦 吉村 香織

二〇一七年七月二日 プロポーズ

二〇一八年二月九日 婚約

二〇一八年五月十九日 挙式

あとがき..

香織さんが龍一郎さんと付き合う、結婚するにあたって多くの友人から「なんで彼を選んだの？」という質問がよくされることを伺った。

香織さんが遠距離になっても彼を想う気持ちや、また龍一郎さんも強い愛があることを少しでも本作から感じ取っていただければ嬉しく思う。

遠くにいるからこそ、改めて相手の存在の大きさを知り、五年の歳月を経てゴールインされたお二方。

今まで物理的な距離で離れていても、二人の心は結ばれたままだった。

きつとこれからは、予期せぬ様々な試練が待ち受けているかもしれない。でも、互いを思いやり続けていれば、今後どんな障壁も越えられるだろう。

花は枯れてしまふけれど、華は枯れない。

二人の生活が、これまで以上に美しく輝くことを願います。

改めて、ご結婚おめでとうございます。

いつまでもお幸せに。

そして、ご参列された方々にとっても幸せな一日でありますように。

ライフストーリー作家 築地 隆佑